

文献

抄録

上肢切断における 義肢の早期装着

本論は、上肢切断の術直後あるいは、術後早期義肢装着法の臨床報告である。本法の利点は、①創の保護、②浮腫のコントロール、③損傷組織の固定、等であるが、特に上肢切断においては、④義肢による両手動作の早期確立が可能となることを、著者は加えている。

今回の対象者は、Fitzsimons General 病院で 1969 年から 1974 年にかけて治療された上肢切断者 96 名で、その内訳は、肩離断 9 名、A/E 29 名、肘離断 6 名、B/E 38 名、手関節離断 14 名であり、うち、術直後義肢装着法を実施したのは、11 名であった。

術後数日間の rigid dressing の後で、Silastic insert をつけた訓練用義肢を用いるのが著者の特徴で、Silastic insert は断端と義肢のソケット間の、理想的な filler であり、elastomer 384 という泡状の液体を流し込み、固めて作製される。なお訓練は、手術創を治療しながら行なわれ、rigid dressing や Silastic insert の装用に よる合併症は起こらなかったと述べている。

母指指間 Web Space の 拘縮の治療

火傷・感染・裂傷・骨折・挫滅・軟部組織の外傷は、母指指間の web space の掌側内転拘縮の直接の原因となる。又、末梢神経損傷の結果としても拘縮が生じる。手の損傷による組織の反応が母指の内転位を引き起こし、母指及び手の背側に起こる浮腫は内転位を強めるため、皮下組織と皮膚の活動性が失われ、治癒過程で生じる瘢痕は硬化し、母指を内転位に固定する。このようにして起こった拘縮は、母指と他指の指腹つまみの制限と、母指の対立機能を減少させ、手の器用さを障害し、作業能力を低下させ、特に大きな物をつかむことが困難となる。

拘縮の予防、及び、傷害後間もなく生じた拘縮の改善には、筋力・ROM の維持増強を目的とする訓練が行われる。陈旧性の拘縮の改善には外科的処置だけが有効である。訓練は術後 1～2 週から行われる。訓練内容は①対立及び外転方向へ第 1 中手骨を徒手で引き伸ばし、この時、傷害が重度なら傷跡へのマッサージを併用する。②円錐体を拘縮部に当て、頂点から底面方向にずらせ、

義肢製作後、結局義肢を装着しなかったのは 16 名で、その理由として、①盲人で感覚によるフィードバックが失われる②上腕神経叢麻痺により断端の機能が悪い③重度の幻視痛や神経鞘腫を合併している場合等をあげている。なお、肩離断者の中には、2 年後に再び義肢を装着した者が 2 名おり、それは外観や歩行時のバランス等の理由によるものであった。

また、切断から本義肢装着までの期間は、術直後義肢装着法の場合 2～6 週（平均 4 週）で、術後早期の場合 8～16 週（平均 12 週）であったが、義肢装着が遅れる原因として二次癒合とか中枢部の損傷等をあげている。

著者は、従来の断端成熟後の本義肢製作、その後の義肢訓練という方法では、リハの過程が遅れ、患者を落胆させ、片手動作を発達させてしまうと述べ、義肢が完全なものでない現状では患者に対し義肢を用いての新しい両手動作パターンを術後早期に学習させる必要性があると強調している。

William E. Burkhalter: The Upper-Extremity Amputee Early and Immediate Post-Surgical Prosthetic Fitting, J. Bone and Joint Surg. 58-A (1), 46～51, 1976.

(横浜市大病院リハ科、作業療法士 大浜牧子)

web space を広げる。③手掌の遠位の皺に母指を近づけたり、母指と他指を対立させる。④器具に手を押しつけたり物をつまむ。⑤splint の装着。static splint は web space を最大 ROM に維持する。Devor の基本的背側 cock up splint に母指を対立位に引っ張る out rigger をつけた dynamic splint は、第 1 と第 2 中手骨の間を持続的に引き延ばす。

web space の ROM はゴニオメーターの第 1 中手骨上の軸と第 2 中手骨上の軸のなす角度で測定する。治療目標別の成績が出された。ROM の維持を目的とした群 14 人の結果は、active ROM で平均 7°、passive ROM で平均 3° 改善した。ROM の改善を目的とした群 17 人は、active、passive ROM 共、平均 13° 改善した。この両群の結果から、筆者らの治療は効果的なものであったとしている。なお後者の群の初期 ROM は前者のそれより小さく、最終 ROM は後者が前者よりも大きかった。

Patricia E. Phelps, Paul M. Weeks: Management of the Thumb-Index Web Space Contracture, A. J. O. T., 30 (9), 1976.

(町田市民病院リハ科、作業療法士 田井啓子)